

妊婦の MRI 撮影と胎児・小児期の予後との関連

Association Between MRI Exposure During Pregnancy and Fetal and Childhood Outcomes.

Ray JG et al

JAMA 316:952-961, 2016

背景 本研究は、1st trimester の MRI と妊娠期間中のガドリニウム(Gd)造影の、児に対する中長期的な影響を評価するために行った。

方法 オンタリオ州のデータベースを使用した研究で、2003～2015年の間に20週以降で分娩に至ったすべての児を対象とした。

結果 1st trimester に MRI を受けた妊婦(n=1,737)には19件の死産と新生児死亡が、MRIを受けていない妊婦(n=1,418,451)には9,844件の死産と新生児死亡(RR 1.68, 95%CI 0.97-2.90)がみられた。調整RRは1.68(95%CI 0.97-2.90), 調整リスク差は4.7/1,000人/年(95%CI 1.6-11.0)であり、形態異常や腫瘍、聴力・視力障害の発生への影響もなかった。

Gd造影MRIを受けた妊婦(n=397)では、MRIを受けていない妊婦(n=1,418,451)と比較して、児の腎性

全身性線維症様疾患罹患の調整HRに有意差はなかった。リウマチ系、炎症性、浸潤性の皮膚疾患になる児は、両群で123人および384,180人であり、調整HR1.36(95%CI 1.09-1.69), 調整リスク差45.3(95%CI 11.3-86.8)であった。一方、死産・新生児死亡は両群で7人および9,844人であり、調整HR3.7(95%CI 1.55-8.85), 調整リスク差47.5/1,000人/年(95%CI 9.7-138.2)であった。

結語 1st trimester におけるMRIは、胎児や小児期の早い段階では児に害を及ぼさない。また妊娠期間中のGd造影MRIは、児のリウマチ系、炎症性、浸潤性の皮膚疾患、死産、新生児死亡の発生と関連する。

(埼玉医科大学産科婦人科学教室 熊川友子, 田丸俊輔 抄)

卵巣癌の罹患率と死亡率についての英国多施設共同研究の卵巣癌スクリーニング別(UKCTOCS)大規模調査

Ovarian cancer screening and mortality in the UK Collaborative Trial of Ovarian Cancer Screening(UKCTOCS): a randomised controlled trial.

Jacobs I et al

Lancet 387:945-956, 2016

背景 卵巣癌の早期発見のための効果的なスクリーニング方法の確立を目指した。

方法 2001～2005年に登録された202,638人(50～74歳)を対象に経膈超音波とCA125によるスクリーニング群(MMS)50,640人と超音波検査のみによるスクリーニング群(UUS)50,639人、スクリーニング非実施群101,359人の1:1:2のランダムに分け追跡調査を行い、卵巣癌の診断と死亡率を見た。スクリーニングは2011年まで実施、2014年まで追跡した。

結果 追跡期間中にMMS群0.7%(338例)、UUS群0.6%(314例)、非スクリーニング群0.6%(630例)が卵巣癌と診断され、卵巣癌による死亡はMMS群0.29%(148例)、UUS群0.30%(154例)、非スクリーニング群0.34%(347例)であった。

Cox比例ハザードモデル解析で追跡0～14年でMMS群15%、UUS群11%の死亡リスクが低下したが有意

差はなかった(p=0.10, p=0.21)。ただし追跡期間を前半(0～7年)、後半(7～14年)に分けて調査したところ、死亡リスクの低減効果は前半にはMMS群で8%、UUS群で2%だったが、後半ではMMS群で23%、UUS群で21%と増加した。スクリーニング開始前に未診断の卵巣癌があった症例を除外した解析では、スクリーニング非実施群と比べて、MMS群で20%有意に死亡リスクが低下していた(p=0.021)。追跡期間の前半では8%、後半では28%の死亡リスク低下を認めた。

結語 はじめの解析では死亡率の低下には至らなかったものの、MMS群での7～14年のfollow-upは卵巣癌の死亡率の低下につながると考えられた。しかし、卵巣癌のスクリーニングの実施に関してはこの追跡評価が、有効性や費用効果の面でも認められる必要がある。

(埼玉医科大学産科婦人科学教室 仲神宏子 抄)